

ル・コック氏著摩尼教遺文 卷三

(Türkische Manichaica aus Chotscho.)
(III von Prof. A. von Le Coq)

去年の夏伯林で色々世話に成つたル・コック氏から復活祭日の日附で贈られた題記の書物を受取つたのは、先月半ば過ぎの頃であつた。自分獨りの事ながらプリンツ・アルブレヒト街のムゼウム・フェール・フェルケルクンデに初めて氏に面會した頃の記憶が、今はなつかしい追想の緒と成つて現はれる。その歳の六月初の伯林は毎日毎夜霧のやうな雨に明け暮れして、冬の外套を纏ふてもまだ寒く、ポツダムを訪ふた一日などは、綿の様な雪の中に立ちすくんだことすらあつた。自から引ッ込み勝ちになる氣分を無理に引立て、二度程此の博物館に氏を訪ふた。königlich という文字の黒く塗りかくされながらに尙判然と讀み得らるゝ次に金字で館名を掲げた入口を入ると、直ぐ見附に日本から持ち込んだ丈餘の大佛が眞中に据ゑてあるのが眼に立つ。二度とも氏は病氣で缺勤とのこと、で、シーグリング氏や、ミュラー氏と語つて歸つた。病氣も癒つたから更めて面會の日を約したいとの書面を受取つて、初めて逢ふたのが七月の二日である。寒かつた伯林は此の頃から急に熱くなつて、下着の汗ばんで苦しいのを、博物館三階の氏の部屋で、かれこれ一時間も語り合つた後、當時閉ざされてあつた中亞菟集品の陳列室を、自身で案内して呉れられた。此の日多くの資料も見多くの話も聞いた中で、最も面白く感じた事は、曾て羅振玉氏が